

KONAN UNIVERSITY

留学生とのカウンセリングにおける言語的 / 非言語的コミュニケーション

| | |
|-----|---|
| 著者 | 中谷 真弥 |
| 雑誌名 | 甲南大学学生相談室紀要 |
| 号 | 26 |
| ページ | 34-42 |
| 発行年 | 2019-02-28 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1260/00003353/ |

留学生とのカウンセリングにおける 言語的／非言語的コミュニケーション

甲南大学心理臨床カウンセリングルーム 中谷真弥

I. 問題

1. 留学生とのカウンセリングにおける言語の問題

留学生にとって言語の問題は、異国における適応の程度を左右するものであり、留学生のストレス要因の上位に位置づけられる（大橋，2008）。当然留学生のメンタルヘルスにかかわるものには、留学生が母国語でコミュニケーションをとれるように相応の語学力が求められる。外国語に堪能なスタッフの配置や養成は、留学生支援の前提条件ともいえるだろう（野田他，2016）。

しかし、全ての学生相談室等に外国語に堪能なスタッフを配置することは容易ではない。我々がカウンセラーとしてかかわる場合も、言語的コミュニケーションや言語的理解が不十分な中で留学生を支援することも必要になるだろう。そして、そのような状況においてどのようにかかわることが、留学生のサポートになるか検討することが支援する側には求められるといえよう。特に、言語的コミュニケーションが不十分だからこそ、非言語的コミュニケーションがカウンセリングプロセスにおいて果たす機能に着目することが重要になると考えられる。その際有用な視点を提供するのが、Beebe & Lachmann（2002）による相互交流理論である。これは、かかわり合いになる二者が、言語的水準だけでなく、非言語的水準のコミュニケーションを通して、どのような相互交流パターンを構築するか精緻化したものである。

2. Beebe & Lachmann による相互交流理論

Beebe & Lachmann（2002）による理論の鍵となる概念が、インプリシット・プロセス

(implicit processing)、エクスプリシット・プロセス (explicit processing)、自己調整 (self regulation)、相互交流調整 (interactive regulation) である。これらの概念は、乳幼児研究者としての Beebe と、自己心理学的精神分析家である Lachmann が、各々の研究成果と臨床実践を結びつける作業を通して発展させてきた。

Beebe らが行った乳幼児研究は、母親と乳児が対面になって遊ぶ様子をビデオ撮影し、そのビデオデータを最短で1/12秒の間隔に分割し、母親と乳児のコミュニケーションを解析するというものであった。そして一連の研究を通して示されたのが、母親と乳児は、本人にも自覚することができないほどの速さで、表情や身振り手振りなどの行動を通して交流しており、かつ、一方のパートナーの行動が完成する前に、もう片方のパートナーは行動を始めているということであった。つまり、かかわり合う二者は、それぞれ自覚のない中で相手からの影響を受けながら、相手の行動を予測して動いている。このような行為-知覚水準で間主観的にオーガナイズされる相互交流のパターンをインプリシット・プロセスとし、表象水準でオーガナイズされる相互交流のパターンであるエクスプリシット・プロセスと区別している。

インプリシット・プロセスとは、時間、空間、情動、覚醒の次元において構築される相互交流パターンであり、手続き的で、顔の表情や身振り手振り、姿勢、声の大きさやリズム、自己接触などの、意図を欠いた水準でなされる。例えば、自転車の乗り方のような手続きのパターンであり、「止まれ」を意味する手を前に出すようなジェス

チャーとは異なるものである。エクスプリシット・プロセスとは、伝統的に精神分析が表象や空想、対象関係といった概念を通して扱ってきた領域であり、象徴的言語的な水準でオーガナイズされる相互交流パターンである。

さらに、相互交流プロセスは、自己調整と相互交流調整のパターンによって構築される。Beebe & Lachmann (2002) は、調整 (regulation) という概念を統計的確率によって規定される概念として扱っている。つまり調整とは、コミュニケーションの随伴の流れや影響の程度を説明するもので、因果関係を示唆するものではない。そして、自己調整とは「相互交流におけるそれぞれの人の行動の規則性と予測可能性の程度 (確率／蓋然性)」(富樫, 2013) と定義され、「(人が) どのように自分自身の行動に影響されるのか」を示し、相互交流調整とは「ある人の先立つ行動がこの瞬間の相手の行動を予測することができる程度 (確率／蓋然性)」(富樫, 2013) と定義され、「人がどのように自分のパートナーの行動に影響されるのか」を示す。自己調整、相互交流調整ともにインプリシット水準、エクスプリシット水準でオーガナイズされ、かつ自己調整は相互交流調整に影響を与えると同時に、相互交流調整は自己調整に影響を与えるという複雑なプロセスが展開するものとしている。そして、以上のような相互交流は母親—乳児間だけではなく、大人同士の関係でも展開するものとして、Beebe と Lachmann は論じている。

II. 目的

留学生とのカウンセリングは、日本人同士によって行われるカウンセリングと比べると、言語的コミュニケーションや、言語的理解に滞りが生じやすいと考えられる。そして、言語的コミュニケーションの問題は、非言語的コミュニケーションにも影響を与えると考えられる。

そこで本論では、留学生であるクライアントと

のカウンセリング事例を提示する。私の語学力の問題のため、私とクライアントは語りの内容を理解し共有することは難しかったが、カウンセリングが進むにつれて、コミュニケーションのパターンは変化していった。その中でもクライアントは私との関係を一貫して肯定的なものと体験していた。そのようなクライアントの体験には、どのようなインプリシット水準とエクスプリシット水準の相互交流パターンが関わっていたか検討する。また言語的コミュニケーションの難しさがカウンセリング関係にどのような影響を与えたか検討することで、留学生とのカウンセリングには、どのような独特な側面があるか検討する。

松村 (2016) が医療場面における医療通訳者には、「言語を正確に訳した上で、それでも『違和感』のようなものが残ることがある」というように、インプリシット水準で生じる「違和感」を臨床的データとして扱えるようになることは、留学生をはじめとする様々な言語文化を背景とするクライアントとのカウンセリングに変化をもたらし、かかわりの幅を広げるのではないかといえる。

III. 事例

A は英語圏の B 国出身の20代半ばの女性であり、私が勤める大学の交換留学生であった。A が抑うつを訴えたことから、大学に設置されている留学生の派遣・受け入れ支援窓口を通して、学生相談室に紹介された。学生相談室には語学に堪能な相談員が所属しているが、留学生からのカウンセリング依頼が年々増加し全ての相談に対応することが難しくなっている。そのため、私が所属する部署が状況に応じて留学生のカウンセリングを担当できるよう連携体制が組まれており、私が A のカウンセリングを担当することになった。

私は米国に留学し、英語で心理療法の訓練を受けた経験があった。しかし、その留学は短期のもので、私は必ずしも英語が堪能というわけではな

く、リスニング能力も不十分であった。英語を使う際は緊張し、日本語でコミュニケーションをとる時のようなリラックスした感覚は持ちにくいのが常であった。そのため、Aとのカウンセリングを引き受けたものの、自分に対応できないのではないかという強い不安があった。Aの紹介に関わった職員からは、Aの話すスピードは非常に早く、聞き取ることが難しいことがしばしばあると情報提供を受けており、それも私の緊張を高める要因の1つであった。

初回セッション時のAは、予約時間より数十分早い時間に学生相談室に着き、待合室ではなく面接室内で待っていた。そして、私が面接室に入室すると、Aは笑顔で挨拶をし、一見すると抑うつを主訴としている人には見えなかった。そしてAは、“欧米的”な大きく足を組んだスタイルで、ゆったりとソファに座った。一人がけのソファは対面に配置されており、私はどっしりと腰を下ろすAの雰囲気にもまれそうな感覚を持ちつつ、私もAと同様にソファに深くもたれかかり、Aと同様に大きく足を組んで両手を大きく広げるような体勢で座った。

まず私は自己紹介し、自分の語学力の程度についても説明した。その後、Aの現在の状況や主訴について確認を行うと、Aは他の留学生たちとの関係に問題を抱えているといい、続けて次のように語った。なぜかAは留学生同士の集まりやショッピングに誘われず、もしAがショッピングに誘ったとしても誰も応じてくれず、誰もAに関心を示してくれない。その理由に心当たりはないが、もしかしたらAが他の留学生より年上であるからかもしれない、もしくはAにはB国にボーイフレンドがいるため、他の留学生がAに嫉妬しているのかもしれない。そうとでも考えないかぎり、なぜ他の留学生がAと関わろうとしないのか説明がつかない。以上のようにAは語ったが、特徴的であったのが、Aが話を進める中でAが私の語学力や理解力を気にかける様子

が、ほぼ見られなかったことにある。

Aは私を凝視し、話す速さは非常に早かった。私は、Aと同様の姿勢で座っていたが、Aが話し始めて数分後に、自分の座り方に居心地の悪さを感じ、足を組むのをやめ少し前のめりの姿勢に座りなおした。そして、その後のAと私のやりとりは、以下のようなパターンで進んでいった。私は集中を高め、Aの語る内容を聞き取り理解しようとするが、Aの語る内容は部分的にしか理解できず、質問や考えをうまく英語にすることもできない。私は、私を凝視するAから目を逸らさず、相槌やうなずき、手を大きく広げ肩をすくめるような身振りや、眉をひそめるような表情によって反応する。そして、Aは話に一段落つけると、少し間をおいてじっと私の目を見る。私は、何か言わなければと感じるが、十分にAの訴えを聞き取れていないため、何を言うか判断がつかない。そこで、私は深呼吸のように大きく息を吐きながら、手を広げつつ首を横にふるような身振りをする。Aは私の行動を凝視しており、私が身振りを始めると、すぐに話を再開させ、私の目を見ながら早口で話し始める。私は、時折事実確認のための質問を行なったが、私が言葉を口にした回数は非常に少なかった。このように、私は身振りや表情でAに反応し、Aは私の反応に敏感に反応しつつも、私が何を語るかには関心がなく、早口で話をするというパターンがあった。

私は、Aにボーイフレンドがいることを他の留学生が嫉妬しているというAの訴えに対して、事実関係を確認したいと考えたが、Aの話についていくのに必死であり、質問を言葉にすることはできなかった。また、私の身振り手振りや、表情は、明らかに大げさで“欧米的”になっていることに気づいていたが、私に自分の振る舞いをコントロールする余裕はなかった。セッション終了時に、Aは「今日は色々話することができてよかった」といい、私は「それは良かったですよ！」と笑顔で力強く応え、改めて週一回の頻度でカウン

セリングを継続することを確認した。その反面、ほとんど言葉で反応することのできなかつた私のことをAは期待外れと感じ、今回限りでAは来談しないのではないかという考えがあった。

私にとってはAとの初回セッションは、Aに圧倒されつづなるとかこなすことができたというものであり、セッション後は著しい疲労を感じていた。また、Aについての見立てを組み立てるための情報を十分に収集できなかったことに無力感を感じていた。しかし、セッションをやりきることができたということには充実感があった。またAの口数の多さのおかげで、私が自分の考えを言葉にする必要がなかったことは、自分の語学力の低さを露呈させずにすんだという意味で、私にとっては救いだったかもしれないとも考えた。さらに自分の“欧米的”な表情や身振り手振りによって、以前米国に留学していた頃の感覚が賦活され、懐かしさを感じる面もあった。

そして、第2セッションの時間になり、私が相談室に向かうと、Aは初回時と同様に予約時間より随分前に来室しており、面接室の中で待っていた。私は、Aが来室していることに非常に安心した。Aは前回と異なり、大きく足を組むことはなくソファに腰掛けていたが、私はその点についてそれ以上何かを考えるわけではなかった。Aは前回のセッションが非常に良かったし、今日も楽しみだったという。私は、相談室には待合室があるので、早く来た場合は待合室で待つよう改めて説明するが、Aは待合室よりも面接室の方が落ち着けるので、面接室で待たせてほしいという。私は、Aが面接室で待とうとするのは、前回のセッションを通してAが私との間で体験したものが関係しているだろうと考えたが、うまく考えを言葉にできなかったため、ただAが面接室内で待つことを了承するのみであった。

第2セッションでのAの語る内容は、他の留学生との関係が中心的なものであった。Aは他の留学生がAとかかわろうとしない理由について、

以前ショッピングに行った際のエピソードが関係しているように思うという。ただし、私にとっては、そのエピソードがそれまでのAたちの関係を壊すほどの決定的なエピソードには思えなかった。

また私は、初回セッションでのやりとりや、Aから聴取した情報をもとに、Aは人との関係を求めているが、相手の様子に合わせてかかわり方を変えることが苦手で、そのためコミュニケーションが一方的なパターンになってしまうのではないかと考えた。そして、このようなコミュニケーションパターンから、Aに自閉症スペクトラムの傾向があることを想定に入れておくことも必要だろうと考えた。さらに、Aはこれまでの経験から「いくら私が求めても、相手は私に答えてくれない」というパターンで対人関係を意味づけやすくなっており、それがAの孤独感や抑うつ高めているようにも考えた。また、Aは留学前から抗うつ薬の処方を受けていたが、長期間の休養を必要とする抑うつエピソードはなく、Aの抑うつは特定のエピソードの後に高まっているようであった。そのため反応性のうつとして、環境や対人関係の変化に注意しながらかかわることが重要になるだろうと考えた。

以上のように私はAの状態を見立てたが、ここにおいても、私は自分の見立てや、理解を伝えることはできず、より状況が明確になるような探索もできなかった。私はもどかしさを感じるが、A自身は私のもどかしさとは別にどんどん話を進めていくため、私はただ集中しながらAの話を聞き、相槌や身振り手振りで応じるばかりであった。

ただし、第3セッション後より、Aと私の振る舞いは少しずつ変化していく。第3セッションが始まるとAはすぐに他の留学生との関係について語った。しかし、それまでと比べるとAの話す速さはゆっくりしたものであった。私は何となくそのことに気づきながらも、とりあえずAの話聞くことに注意を向けていた。そして、Aの話が一段落ついたところで、私から、Aと日本人

の学生との関係はどうなっているか質問した。これは、初回セッション時から私が気になっていることであった。すると、Aは、それまで私に対して日本人学生との関係では特に問題がないといていたが、実は、間違った日本語を使ってしまうのではないかという不安があり日本人とはかかわりにくいという。さらに、日本に留学に来ているにも関わらず、日本語を使わず英語で話すことや、日本人学生が教えてくれた日本語を忘れてしまうことに罪悪感があり、私との間でも英語でしか話していないことに申し訳なさがあるという。また、留学生同士の会話でもAは話すのが速いと指摘されることがあり、B国にいた頃も話す速さについては指摘されてきたという。このような面から、英語、日本語を問わず話すこと自体に非常に敏感になり緊張があるという。

私は、ようやくAの体験を把握できたという安心感を感じつつ、第4セッションの中で、ふとAに以下のように伝えた。実はAとのセッションがある2、3日前になると、私自身緊張を感じている面がある。私の語学力が不十分なことに自覚はあるし、Aのいっていることをうまく聞き取れないことも多い。自分がAの役に立っていないのではないかと考えたりもする。だからこそ、Aがこうやってセッションにやってきて、私とかかわろうとしてくれるのはありがたいことであるし、セッションが終わると充実感もある。以上のように伝えていると、Aは涙を流し、A自身もこのカウンセリングが非常に楽しみであり、私がAのことを十分に理解していないのはわかっているが、私とのやりとりに問題は感じていないという。

そして、このやりとりを境にして、私はAの語る内容を理解しようと過敏になっていたことを自覚するようになった。むしろ、“日本語でやりとりをしたとしても相手の体験を十分に把握できるわけではないのだから”といった開き直りのような感覚も持つようになり、Aの語る内容を

“しっかり”と理解することには意識を向けなくなっていく。並行するようにAの語る内容も変化していき、他の留学生との関係の話よりも、Aの日常生活や趣味、関心ごとについての話題が多くなっていく。さらに、Aから「～って日本語でなんていうの？」といった質問をしてくることも増える。

またAと私の振る舞いも変化していった。例えばあるセッションでは、Aが留学生同士で昼食をとったという話から、Aの好きな食べ物についての話になった。Aの語り口調はゆっくりとしたもので、Aはソファの上であぐらをかき、時々視線を落としながら話を進める。私はソファの肘掛けに肘をのせた姿勢でAの話の聞き、以前と比べると身振りは控えめになっていた。そして、Aの話が一段落つくと、私は少し姿勢を整えてから簡単なコメントをする。私がコメントし終わるのをAは相槌を打ちながら待ち、私が話し終わると、またAが話を始める。このようなパターンでセッションが進み、その雰囲気は非常にゆったりとしたものであった。私の口数は増えているにも関わらず、私の注意力や覚醒水準は明らかに低下した状態にあり、そのセッションは終了時間を10分ほどオーバーしてしまうほどであった。私がセッション終了時間を超えていることを伝えると、Aも「時間が経つのが早い！」と驚いた。そのセッションの間、エキサイトするような瞬間はなかったが、私はAとスムーズなやりとりができるようになったことに、非常に充実を感じていた。

その後Aは、1回セッションをキャンセルしたのちの第11セッションで、カウンセリングの終結を相談してきた。最近、一緒に観光やショッピングに行けるような留学生の友人ができたことから、生活に大きな問題を感じなくなり、日常生活に支障をきたすほどの抑うつを感じることもなくなってきたという。そのためカウンセリングの終結を考えているとのことであった。

そこで改めて生活状況を確認すると、気分の変

調は目立たず、留学生との関係がAの支えになっているようであったため、第11セッションを最後にカウンセリングは終結することになった。Aは、このカウンセリングは雑談のようなものだったが、だからこそ良かったし、「言いたいことを好き放題、大声でいえることが私には重要だった」という。また、実は、以前AはB国でカウンセリングを1回のみ受けたことがあるのだが、「シリアスすぎる」内容であったため、逆に苦しくなってしまったという。その一方、私とのカウンセリングは非常に楽しみでリラックスできたし、いつもスキップしながらくるような感じだったと、涙を流しながら、Aは語った。

IV. 考察

このカウンセリングは、言語的コミュニケーションに問題を抱えるAと私が、カウンセリングが進むにつれ言語的コミュニケーションを活性化させるに至ったという点で独特である。そしてAと私の関係が展開する上で、非言語的コミュニケーションが大きな役割を果たしていた。

カウンセリングが進むにつれ、Aと私の身振り手振り、表情、話す速さや量などの非言語的コミュニケーションは変化していった。カウンセリング開始当初のAと私の関係は、非常に高い覚醒水準の中で展開しており、Aの場合は話す速さ、私への凝視、大きく組んだ脚などによって示され、私の場合は、大げさな“欧米的”振る舞いや表情によって示されるものであった。カウンセリングの後半になると、セッション中のAと私の覚醒水準は低下していき、Aの話し方はゆっくりとしたものになり、視線を落とし、座り方もリラックスしたものになる。私は、タイムマネジメントが疎かになるほど注意力が落ち、気軽に質問するようになり、Aの体験を探索し明確にしようとするカウンセラー的な態度にこだわらなくなっていく。

そして、このような両者の変化が生じている中

でも、Aは一貫して私との関係を肯定的なものと体験していた。このAの体験を理解するために、インプリシット水準、エクスプリシット水準でどのような相互交流パターンが展開していたか検討する。

1. インプリシット水準、エクスプリシット水準の相互交流

カウンセリング開始当初のAの振る舞いの特徴は、話の速さ、私への凝視などに示されるもので、過剰警戒 (Beebe & Lachmann, 2002) といえるものであった。留学生仲間からだけでなく、B国においても話すスピードが早いと指摘されていたことを考えると、おそらくAは、興奮し覚醒が高まると、その勢いで振る舞ってしまい自分の状態を調整することに難が生じやすい傾向にあったと考えられる。Aは、カウンセリング開始時間の随分前から面接室の中で待っていたが、それは一人の時間を作り刺激を少なくすることで、覚醒、緊張を落ち着けるためのAなりのやり方だったといえるかもしれない。カウンセリング開始当初のAの自己調整はこのようなパターンにあり、これはインプリシット水準の自己調整といえるだろう。

その一方、カウンセリング開始当初の私の覚醒水準も非常に高かった。私は過剰な覚醒水準の高さを維持させるため、セッション後は著しい疲労を感じており、私の自己調整は持続可能なパターンではなかった。しかし、私の“欧米的”振る舞いには、インプリシット水準の自己調整として機能し、自らを活性化させるような側面があったと考えられる。

このように、Aと私は、互いに高い覚醒水準の中で自己調整の難しさを抱えていた。しかし、カウンセリングプロセスを検討すると、各々の自己調整が相互交流調整に影響し、次第に互いの覚醒水準を低下させる側面があったと考えられる。

Aは留学生との関係に問題を抱えており、それ

は「いくら私が求めても、相手は私に答えてくれない」と言語化できる予期のパターン (Beebe & Lachmann, 2002) を、エクспリシット水準で組織化するものだったといえるかもしれない。そのため、A はより一層相手の振る舞いに対して警戒的になり、カウンセリング中も私の振る舞いに対して敏感になっていたと考えられる。そして、この A の過剰警戒に対して、私は“欧米的”な振る舞いで、頻繁に回答していた。

Beebe & Lachmann (2002) が回避型の愛着パターンをもつ乳児とその母親の交流パターンを観察したところ、回避型の乳児の母親は、安定型の乳児の母親よりも警戒心が高く、回避型の乳児は、安定型の乳児よりも母親の発声への応答性が低いという結果が得られた。この結果について Beebe & Lachmann は「母親の発声に対する回避型の幼児の応答性の欠如が、(部分的に) どの程度母親の過度な凝視の随伴性に対する反応なのか、あるいは逆に、母親の過度な凝視の随伴性が、どの程度回避型の子どもとかかわろうとする上での補償的警戒心なのかを知ることはできません。…しかし、まさにその警戒自体が相互交流を妨害します」としている。

この乳児と母親の関係を、私と A の関係に置き換えると、A (母親) の凝視に対して、私 (乳児) は圧倒されるような感じを持ちつつもかわりを回避することなく、むしろ積極的に A (母親) に応答したといえるだろう。これは Beebe & Lachmann が観察した乳児と母親の相互交流パターンとは異なるものである。さらに、私の“欧米的”振る舞いは、A に対する刺激ではあったが、A の覚醒水準の高さとはマッチ (Beebe & Lachmann, 2002) したものであったかもしれない。A は最終セッションの中で、B 国で受けたカウンセリングは負担になったと語ったが、もし私が言語的に介入していたならば、それは A にとって過剰な刺激になっていたかもしれない。私が意図したものではなかったが、私が“欧米的”に振

る舞いつつも、言語的に介入しなかったこと (できなかったこと) は、A の覚醒水準の低下に影響を与えたと考えられる。つまり、A の振る舞いには A の覚醒水準にマッチした覚醒水準の私の応答が随伴するというパターンが、インプリシット水準で組織化されていたといえるだろう。

また、A の覚醒水準の高さは、インプリシット水準の相互交流調整として私の振る舞いに影響を与えたが、その一方で、A の口数の多さのおかげで、私は自分の考えを言葉にする必要がなかったともいえる。それは私が自己調整する時間的余裕を作り、私の覚醒水準を低下させる面があったともいえる。

以上のように、A と私は、互いに高い覚醒水準の中がかかわりながらも、主に非言語的な交流を通して、互いの覚醒水準を低下させるように影響を与えていったと考えられる。そしてカウンセリングが進むにつれ、A と私のやりとりのスピードは少しずつ低下し、互いの振る舞いもリラックスしたものになっていった。言語的コミュニケーションも一方的なものではなくなり、私が気軽に A に質問することが増え、A も同様に日本語について私に質問することが増えていった。このようなコミュニケーションの変化は徐々に発展したものであったが、この段階への移行には、第 4 セッションにおいて、A と私がともにカウンセリングをどのように体験しているか語り合うことができたことが、大きなきっかけであったと考えられる。これはエクспリシット水準の相互交流が、その後続くインプリシット水準の相互交流に影響を与えたものといえる。

そして、カウンセリング後半になると、私が話し終えるのを待ってから、A が話し始めるという、それまでとは異なるインプリシット水準の相互交流パターンがみられるようになっていった。これはカウンセリング開始当初と比べると、ゆっくりしたリズムを作るもので、互いの覚醒水準に影響を与えるものだったといえよう。さらに、互

いが質問するというやりとりを通して、私が話をする量が増えたことが、相互交流の大きな変化につながったといえる。私の話す速さは必然的にAよりゆっくりしたものであるため、私の話す量が増えれば増えるほど、相互交流のスピードはゆっくりしたものになる。それが双方の覚醒水準を低下させ、結果としてリラックスしながら「言いたいことを好き放題、大声でいえる」という相互交流に結びついたといえる。そして、このような相互交流の変化につながったのは、Aの行動や状態に対して、私が回避せず、かつ適度な刺激量でAに応答するという相互交流パターンの予期(Beebe & Lachmann, 2002)が、インプリシット水準で構築されたことにあると考えられる。

2. 言語的理解が不十分な関係における相互交流

Aと私のカウンセリングプロセスは、以上のようなインプリシット水準、エクスプリシット水準の相互交流パターンが構築され、変化していったものとして理解することができる。その一方、言語的に理解を深めるような交流は、通常のカウンセリングと比べると活発なものではなかった。例えば、Aと私の話す速さが状況によってどのように変化するのか、話す速さがどのようなAと私の体験に関わっているかを私たちが話し合うことはなかった。ここれは私の語学力の不十分さが大きな要因ではある。しかし、私の語学力の不十分さが、Aと私の関係においては、偶然ではあるが独特な機能を果たしていた面も示唆される。

私が日本人のクライアントと日本語でカウンセリングを行う場合と比べると、Aとのカウンセリング開始当初の私の覚醒水準は、著しい高さであった。これは、Aの振る舞いからの影響もあるが、私自身の語学力の問題のため、私は集中してAの語りに耳を傾けなければ、Aの訴えを理解できないことにあった。ただし、カウンセリングプロセスを検討すると、私の覚醒水準の程度は、Aの覚醒水準とマッチしたものであったといえる。

もし私の語学力が十分なものであれば、私はAの話す内容を聞き取り理解するために特に集中する必要はなく、私の覚醒水準は低下し、私の振る舞いは、より抑制されたものであったかもしれない。また、私は言語的な介入を積極的に進め、Aの認知傾向や情緒体験を明確にしようと試みたかもしれない。しかし、私が質問することでAは内省しなければならなくなる。そして内省することに伴う緊張感は、Aがリラックスすることを難しくさせたかもしれない。

加えて、カウンセリング後半になると、私の覚醒水準は低下するが、その一方で私の発話量が増加するという面があった。これは一見すると矛盾した状態だといえ、覚醒水準と発話自体の関係について今後検討が必要になると考えられる。ただし、私が自身の語学力に不全感を持っているからこそ、言語でAと交流できること自体が、私の安心につながる面があったかもしれない。

3. 留学生とのカウンセリングの独特さ

留学生を支援する側は、留学生が何に関してどのような体験をしており、どのようなサポートを求めているか把握しようとする。そして、留学生を支える具体的手立てを見出すことは、支援する側の重要な役割であろう。

その一方、少なくとも日本人同士のやりとりと比べると、留学生との関係では、かかわりあう両者は相手の語りを聞き理解する上で、注意を高めざるを得ないと考えられる。特に、Aと私の関係のように、言語的コミュニケーションや言語的理解が不十分な中では、かかわりあう両者の覚醒水準は高まりやすいといえよう。したがって、具体的サポートや言語的理解だけでなく、かかわりあう両者の覚醒水準を意識し、どのように覚醒を調整していくかという視点は、留学生などの異なる言語文化を背景とするクライアントを支援していく上で有意義になると考えられる。

また、言語的介入の少ない私のかかわりは、い

わゆる傾聴を中心としたものだったといえるかもしれない。ただし、本論で示したように、傾聴は必ずしもクライアントが一方向的に語り、それをカウンセラーが受身的に聞くことではないといえる。傾聴といえるかわりににおいても、インプリシット水準では相互交流パターンが生じており、そのパターンがどのようなものであるか認識され、理解されることは「治療にとって価値ある追加情報」(Beebe & Lachmann, 2002) になるといえる。

付 記

本論文執筆にあたり、A さんには書面によってご同意をいただきました。快くご協力いただいたA さんに、心から感謝申し上げます。

文 献

- Beebe, B. & Lachmann, M.F. 2002 *Infant Research and Adult Treatment: A Dyadic Systems Approach*. Hillsdale, NJ: Analytic Press. (富樫公一監訳 2008 乳児研究と成人の精神分析—共構築され続ける相互交流の理論 誠信書房)
- 松村紀子 2016 医療通訳を使う 野田文隆・秋山剛編著 あなたにもできる外国人へのこころの支援 多文化共生時代のガイドブック 岩崎学術出版社 133-141
- 野田文隆・秋山剛編著 2016 あなたにもできる外国人へのこころの支援 多文化共生時代のガイドブック 岩崎学術出版社
- 大橋敏子 2008 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 京都大学学術出版会
- 富樫公一 2013 相互交流の二つの次元：ビービーとラックマンの乳児研究に基づく二者関係のシステム理論 富樫公一編著 ポストコフートの精神分析的システム理論 誠信書房 75-87

ABSTRACT

Verbal/Nonverbal Communication in Counseling International Students

NAKATANI, Shinya
Konan University

When seeing international students, we tend to be conscious of the problem of language skills. However, it is not easy to arrange enough staffs who are fluent in foreign languages in each students supporting facility. Therefore, finding better ways to support international students without enough language skills is also important. In this paper, I presented clinical case vignett with a international student. Then, based on Beebe and Lachmann's dyadic systems theory, I discussed how verbal/nonverbal interaction was going on in our relationship. Although it was difficult to develop mutual understanding verbally, we interacted fully in nonverbal level. Regulating speaking speed, nodding, facial expression and so forth had a really important function to regulate our arousal level. It shows that even if we don't have enough language skills, it would not matter for international students as long as we are able to communicate smoothly in nonverbal level.

Key Words : international student, verbal/nonverbal communication, implicit/explicit processing